

「稲むらの火講座」講演会について

6月4日(土)に「稲むらの火講座」講演会を開催しました。今回は「やかただより4月号」でお知らせしましたが、神戸から山地久美子先生をお迎えしました。講演会の直前6月1日に、神戸大学の准教授に就任され、たいへんお忙しい時期の開催になってしまいました。コロナの影響で、何度も延期をしてきた会合でした。

「全国被災地語り部シンポジウムの取組みから考える防災・減災」という演題でお話いただきました。このシンポジウムの仕掛人としてのお話でしたが、このシンポジウムは「阪神淡路大震災」「東日本大震災」の津波災害、「熊本地震」等の近年発災した大災害の被災者がほとんどです。

一方、私達広川町は168年前の「安政地震・津波」を語り続けている、歴史の語り部といってもいいですね。だから、被災地というよりも未災地と言う方が近いかもしれません。

講演の中の話、神戸等では、震災を体験していないと言うと、一歩引かれる、体験していない人の語り部



は信用出来ないということでしょうか。広川町の語り部・ガイドは全員が体験していないのでそういうことはないですね。歴史の語り部とも言えます。ただ、広川町へ来られる中で、かなりの高齢者は、1946(昭和21)年の昭和南海地震・津波の体験者は居られます。こういう方々の体験談をお聞きする事も貴重なことだとは思いますが。

今回の講演の中で、近年の大災害の時の様子をお聞き出来たのは、今後、自分自身が災害に遭遇した時の対応に役立つことと思います。話だけでも、知らないより知っている方がずっと役立つことでしょう。自分自身の命を守るために。

「和歌山県の気候変動」より

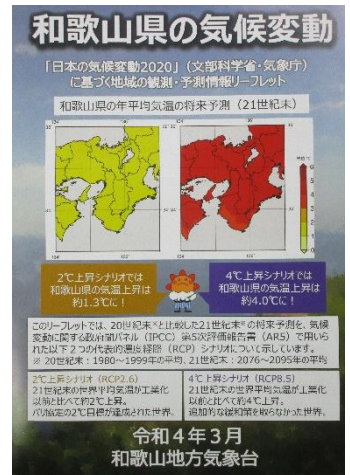
先月号で、「防災情報チラシ」を配布しています、とお伝えしました。その中で、和歌山地方気象台が本年3月に作成された「和歌山県の気候変動」というチラシの中味を詳しく見ます。

中でも、「これまでの変化」では、年平均気温が、和歌山で100年あたり、約1.5℃上昇しているそうです。暑くなってきているとは思っているが、1.5℃くらいだったのかと思いますね。昔は、家にエアコンなんて無かった。夜、寝る時に蚊帳を吊ったのは記憶にありますが、特に戸を開け放ったことはなかったです。100年で1.5℃の上昇だけとは思いませんでした。

雨は、短時間に降る非常に激しい雨(1時間当たり50mm以上)の回数には増加傾向にあるそうです。昭和28年の紀州大水害のような水害は最近、広川町にはありません。いつからか、「線状降水帯」という言葉ができました。大雨を降らす雨雲が後から後から流れるようになってくるのです。毎年、国内のどこかで大雨、水害が起っています。このことですね。

「これからの変化」は20世紀末と21世紀末を比較しています。1世紀(100年)で、年平均気温は約4.0℃上昇シナリオでは猛暑日は約27日、真夏日約63日、熱帯夜約55日増加の見込(2℃上昇のシナリオでは、和歌山県で約1.3℃上昇し、猛暑日約3日、真夏日18日、熱帯夜14日増加の見込)ということ、暑くなるということです。

又、雨の変化は近畿地方で、1日降水量200mm以上の回数が4℃上昇シナリオで約2.7倍(2℃上昇シナリオでは約2倍)というように、降水量も増加するようです。異常気象という言葉で片づけられないことを、心に留めておきましょう。



百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第16回 心理学用語の乱用にご用心

自分が居るところまで津波が到達することなんてあるまい、自分が巻き込まれて死ぬようなことなんてありえないだろう、そんな根拠なき“過信”をすることを、心理学用語で「正常性バイアス」という。なるほど、人の心性をよく捉えた言葉ではある。

みんなが逃げていく。自分も逃げなきゃ…。このような反応の連鎖で避難行動が実行される現象を、心理学では「吸着誘導」という。他の人のふるまいに吸い寄せられるようにして無理せずに行動を為すことで、多くの命が助かる。

一方で、みんなが逃げない、だから自分も逃げない、結局、適切に避難する機会を逃してしまうような事態を、心理学で何と言うか。ご存知、「同調性バイアス」である。付和雷同、優柔不断の落とし穴を指す。

さて、このようにして心理学用語を並べていくと、そろそろ違和を感じたりしないだろうか。結果がセーフならば「吸着誘導」、アウトならば「同調性バイアス」。仮に、自分だけ逃げようとして、その結果、交通事故にでも巻き込まれたなら、「心理的パニック」に陥っていたものと指弾されることだろう。専門家の言うとおりに逃げた結果、それがアウトだったら、「エキスパート・エラー」という評価が下るのかもしれない。

心理学用語は、“後出しジャンケン(hindsight)”でよいのであれば、なんとでも説明できるように体系が作られている。しかし実際に物事が動いている渦中であっては、まだ結果は誰にもわからない。だから、いま「同調性バイアス」に陥って避難しなかったとしても、助かってしまえば、「冷静に判断した」などと言ってのけることができるのだ。「吸着誘導」で全滅することもある。物知り顔で心理学用語を乱用しているだけでは、進行形のリスクに対峙することはできない。

【館長日記】

○月△日 昨年、浪曲師菊地まどかさんに、「稲むらの火の館応援大使」を委嘱しました。菊池さんは、新進の女流浪曲師として注目されています。「防災浪曲」というジャンルを立ち上げて、師匠から受け継いだ演目以外で、「稲むらの火」を作品化されていますが、NHK総合でも放送されています。以前の放送予定が、国会中継が入った関係で、深夜の放送になりました。その番組が、4月28日昼に再放送されました。

以前に、この番組収録をNHKスタジオで見たので、と言って来館された方がいました。この度は、テレビを見たので、ということで愛知県の老夫婦が見学に来られました。浪曲で演じていただくことによって、「稲むらの火」が広く知られていくのは、うれしいことです。それが、更に津波防災に繋がって欲しいものです。

なお、菊地まどかさんは、昨年「命のらせん階段」を作品化されました。これは、東日本大震災の際の宮城県気仙沼市での出来事をもとに、つくられたものです。

◎月△日 最近、それぞれの活動のために、防災等の調査に来られる方が、相次いでいます。

「稲むらの火」をテーマにして防災のプロジェクトを立ち上げようとされている方がいます。4月以降で3、4回も来られました。自分自身の活動のテーマに防災を取り上げようとするのは、困難な事もあるかと思いますが、がんばってほしいと思います。精一杯協力しようと思います。

もう一人、町内在住の高校生は、今年開催される「アジア・オセアニア高校生サミット」に参加されるとのことで、事前調査をされているということで来館されました。この「サミット」は、数年前から和歌山県主催で開催されてきました。この2年間はコロナの影響で中止されたと思います。今年も、海外高校生は和歌山へ来られないので、リモートでの開催だそうです。

私も昨年、南太平洋の7か国の大学生とリモートで、話し合いましたが、対面と違って、意思疎通を図るのが難しいことがありました。そういうことも含めて話しましたが、熱心に質問されたりして意欲的でした。良い経験になるでしょう。